

— 研究報告 —

看護学生が看護モデルとして支持する看護学実習指導者の実習指導方法

藤野みつ子, 高見知世子, 福井香代子, 小野幸子, 西村路子,
多川晴美, 林周子,
滋賀医科大学医学部附属病院

要旨

看護学生が看護モデルとして支持する実習指導者の実習指導方法を明らかにするために、実習指導者6名に面接調査を行った。研究目的に沿ってカテゴリーを抽出し、分析した。結果、「教育者の姿勢で臨む」、「患者とのスムーズなコミュニケーションを支援する」、「メンタルヘルス面の支援をする」、「人的資源を教育に活用する」、「実習効果を上げるスキルを活用する」、「学生の能力を可能な限り引き出す」、「看護のステキを伝授する」の7つのカテゴリーを分類した。看護モデルとして支持された実習指導者は、看護学生を大事に育てようという細やかな配慮をしていた。学生を愛し、受容し、肯定的に指導する一方で、実習指導そのものを楽しむ気持ちの余裕も伺えた。看護には、喜びや、楽しさ、専門職としての魅力があることを伝えていた。

キーワード：看護管理、看護師確保、就業動機、看護実習、看護モデル

はじめに

平成19年度に行われた患者対看護師を7対1の割合で配置とする入院基本料金の新設は、病院の収益増のために多くの病院を看護師確保に駆り立てた。いわゆる看護師の争奪戦のはじまりである。それ以来、日本の看護管理者の最も重要な案件は、“看護師確保にある”と言われるようになった。

看護職採用試験の際の応募動機を“看護実習時に見た看護モデルの存在”とあげる看護学生がいる。看護学生が就職先を選定する理由として、「卒後教育」を重要視する傾向¹⁾がある。また、就業先を選ぶために看護学生は「実習時の印象」や「人間関係」にも着目しており²⁾、実習やインターンシップにおいて見極めを行っていることが推察できる。

実習指導者は、看護職として必要な知識・技術・態度などの職業的文化を学ぶ上で、看護モデルの役割を果たす³⁾。そして、学生の看護専門職への意欲を高め⁴⁾、就業動機の促進及び決定に影響している⁵⁾など、実習指導者は単なる看護実習指導だけではなく、看護師獲得のためにも重要な役割を担っていると言える。

今回、効果的な人材確保対策として、看護学生が看護モデルとして支持する実習指導者に着目した。彼らがどのような実習指導を行っているかを明らかにすれば、看護モデルとなる実習指導者の育成のための示唆を得ることができると考えた。

I. 研究目的

看護学実習において、看護学生が看護モデルとして支持された実習指導者の実習指導方法を明らかにする。

II. 用語の定義

看護モデルとは、看護学生が看護職としての態度や行動を学び、就職動機に影響を受けたと語った看護師である。

III. 研究方法

1. 対象

看護学生から看護モデルと指名された実習指導者の内、本研究の主旨に賛同し、協力することに同意が得られた6名の実習指導者である。

2. データ収集と分析

半構成的面接法を用いて面接し、許可を得て面接内容をICレコーダーに録音した。語られた内容は逐語録におこし、研究目的に沿って1意味内容毎にコード化した。KJ法の手法を用いて、類似したカテゴリーを抽出し、命名した。分析は、質的研究者のスーパーバイズを得て、データの精度と信頼性の確保に努めた。

3. 調査期間

2009年1月～3月

4. 倫理的配慮

研究の実施にあたっては、滋賀医科大学医学部附属病院看護研究倫理審査会の承認(H20-24)を得た。協力者には、文書と口頭で研究主旨、研究協力の任意性、匿名性と秘密性の厳守、研究以外にデータを使用しない、厳重なデータ管理と研究終了時のデータ粉碎処理の保証等について十分説明し、文書で同意を得た。

IV. 結果および考察

1. 研究協力者の背景

研究協力者は、全て大学病院に勤務する看護師であった。平均年齢は 32.3 歳 (SD±4.1)、平均実務経験年数は 10.5 年 (SD±3.6)、平均実習指導経験年数は 3.7 年 (SD±1.9) であった。6 週間以上の実習指導者講習会を修了した者は 1 名のみであった。職位は副看護部長 3 名、看護師 2 名、認定看護師 1 名であった。

2. 結果

逐語録から語られた内容ごとに意味を解釈し、177 の意味項目を抽出した。それらから 26 下位カテゴリー < > を分類し、さらに 7 上位カテゴリー **【** を抽出した。上位カテゴリーの内、**【教育者の姿勢で臨む】** は、<講習会の学びを活用する>、<医療安全を考慮する>、<患者選定に拘る>、<学生と良い関係を作る>、<学生の支援者となる>、<学生を大事に思う>、<看護実践モデルを示す>、<医療チームの一員と考える>、<実習を効果的にする体制を作る>、<実習指導を楽しむ> という 10 の下位カテゴリーを有した。**【患者とのスムーズなコミュニケーションを支援する】** は、<学生と患者の人間構築支援>、<コミュニケーション技術の指導> という 2 つの下位カテゴリーを有した。**【メンタルヘルス面の支援をする】** は、<メンタルヘルス面を支援する>、<モチベーションの支持をする>、<リラックスさせる> という 3 つの下位カテゴリーを有した。**【人的資源を教育に活用する】** は、<看護スタッフを活用する>、<教員と相談する> という 2 つの下位カテゴリーを有した。**【実習効果を上げるスキルを活用する】** は、<学んで欲しい方向へ誘導する>、<指導要項を活用する>、<経験知を活用する>、<目標達成を目指す>、<実習の様子を情報収集する> という 5 つの下位カテゴリーを有した。**【学生の能力を可能な限り引き出す】** は、<学生の主体性を引き出す>、<個別指導を心がける> という 2 つの下位カテゴリーを有した。**【看護のステキを伝授する】** は、<看護のプラスイメージを示す>、<看護のステキを伝える> という 2 つの下位カテゴリーを有した。

3. 考察

看護モデルと支持される実習指導者の指導方法は下記のように考えられた。

1) 教育者の姿勢で臨む

「学校レベルで立てている目標とかまで気にしたことがなかったです、でもそこが一番気にしていなければいけなかったんです。(中略) この時期に来る学生はここまで求めようとか、目標を感じるようになりまして。」と語られた<講習会の学びを活用する>ことや、

「技術的なことは、学校がいいと言われる範囲なので、まあまあのできる限り安全に確かにできるようには (学生と) 一緒にするようにしています。」など、<医療安全を考慮する>ことを重要視しながら指導を行っていた。特に、最近の病院の医療安全対策により、臨床実習においては、患者の安全を図ることがより厳しく求められている。それによって学生が畏縮することがないように、実習指導者は、学生が行う看護ケアには看護師が必ず寄り添い、見守りながら、成功体験に導こうと考えていた。

<学生と良い関係を作る>、<学生を大事に思う>のカテゴリーに含まれる内容は、学生を看護職の後輩として気にかけて、愛し、看護職に向かないと思われるような学生にも、自分の段階でリタイアさせまいと熱い情熱を注ぐものであった。「調べていないのならできないよ、とかいう言い方はしないようにしています。」「学生さんが困る前に助け船を出す。」など、学生の状況を細かく観察し、できるだけ<学生の支援者となる>存在であることに努めていた。学生が実習指導者を信頼し思いやりがある、と判断することにより学習効果を高めている⁹⁾と言われており、実習指導者のこれらの姿勢は、学習成果を導くだけではなく、看護学生の成長に影響を及ぼしていると考えられる。

実習指導者は、学生に関わる実習指導者自身の心構えとして、<看護実践モデルを示す>ことを意識していた。例えば、「(私は) こんな看護観もっているよという話から、じゃ、あなたが考える看護観ってどういうものかなってところ、受け持ちの患者さん通じて話をしたりします。」や「(私が) 患者さんとのように接しているか、とりあえず見てもらって、自分を見てもらう。」と語られているように、実習指導者自らが看護観を語り、そして自分自身の看護実践を意識的に見せることによって、学生に言葉では言い表せない看護の深い部分を感じてもらい、学んでもらうという“場”を演出していた。これは、実習指導のスキルであるとともに、実習指導者がそれらの演出ができる高い看護知識と実践力をもち、かつ看護師としての自信をもっていることの表れだと思われる。さらに、実習指導者は、自分自身の存在が看護学生にとっていかに重要な立場、あるいは役割であるかを十分認識して行動していることも言える。

また、「確かに学生という学ぶ立場であるんだけど、学生っていう身分と一緒に業務して行くんだ、という意識は常にもっています。」と語られているように、学生には、<医療チームの一員と考える>ように看護師との連絡や教員との連携をとっていた。臨床現場では、患者に直接的に看護ケアを行うチームという大きな枠組みの中に看護学生も組み込まれている。学生がチー

ムの一員として受け入れられていると感じることは、良い実習環境の条件の一つでもある。

実習指導者は、看護学生が受け持つ患者によって、学習効果に大きな影響があると理解している。実習指導要領に基づいて、病気の経過と病状は基より患者の人柄や、家族背景、同室者との関係までも考慮し、悩みぬく程に<患者選定にこだわる>様子が伺えた。そして入院中の経過がわかりやすく、コミュニケーションも取りやすい、実習目標が達成できる患者を受け持ち患者として推薦していた。また、<実習を効果的にする体制を作る>ために、指導者自身が実習指導に専念できるように看護師長や他看護師に協力を要請していた。一方では、実習期間中の指導者自身の体調管理にも気を使っていた。それらの行動からは、実習指導に対する高いコミットメントを垣間みることができる。

さらに、「実習指導しているときは（中略）振り返ると楽しかったなと思います。」や「自分が受ける影響もたくさんあり、学生指導するのはすごく好きですね。」など、<実習指導を楽しむ>余裕をもっていた。実習指導者としての役割をポジティブに受け止めている者ほど、自身のコミュニケーション能力やレディネスのアセスメント力が高いと受け止めており、それによって心理的に安定した実習指導を行うことができる⁸⁾。実習指導者自身が実習指導を“楽しい”という感情で看護学生に関わることが、学生には余裕がある能力の高い看護師として解釈され、看護モデルとして支持された要因の一つではないかと推察する。

2) 患者とのスムーズなコミュニケーションを支援する

患者が良い看護を受けたと感じ、高い満足を得るためには、コミュニケーションが重要な役割を果たす。実習指導者は、まず学生に対し患者の全体像を丁寧に説明する。そして患者の病床へ一緒に行き、最初の対面に最大限の配慮をしている。「あまり受入れが良くない患者さんとかもいいますが、（中略）こっちもすごい気を使って接したりしていたんですけど。」と語られる<学生と患者の人間構築支援>を行っていた。また、患者とのやり取りを、リラックスして会話をするように助言を行うなど、<コミュニケーション技術の指導>にも心を砕いていた。

看護学生が実習中に最もストレスと感じることは、人間関係である⁷⁾。核家族化や最近の社会事情の変化により、コミュニケーション力が低下したと言われ、人間関係を作ることを苦手とする学生は多い。看護学生は実習が始まると、実習指導者や患者を目の前にして、様々なことへの緊張感と不安な心理的状況の中にある。それら看護学生の現状を十分理解した上で、実習指導者は、人間関係の調整やコミュニケーションに

対する助言と指導を行っていた。

3) メンタルヘルス面の支援をする

初めて対峙する患者への緊張感のあまり体調を崩す学生もいる。患者の病状が思うように回復しないことで患者に拒否されたり、あるいは、患者の病状に合わせて看護学生自身が、極端に一喜一憂することもある。看護学生にとって実習は、精神的強さを育む機会でもある。

実習指導者は、学生の悩みを聞いて解決し、「（指導者自身）が理不尽な、こう、感情的に怖い、見た目に怖くないように気をつけています。」といった実習指導者自身を怖い存在と思われないイメージ作りや「そんなあかんやん、とか言って学生さんをくじいてもしかない。」と、前向きになるように働きかけ、ひたすら精神面を支えるなど<メンタル面を支援する>ような言動をしていた。また、励ましの言葉や、<モチベーションの支持をする>ような気配りや緊張をほぐし<リラックスさせる>という対応を意識的に行っていた。看護学生を必死に支えようとする実習指導者の姿勢を伺うことができる。このような実習指導者のありようを目の当たりにした看護学生により、実習指導者は頼りになる信頼できる存在となりうる。

4) 人的資源を教育に活用する

実習指導者は、先輩実習指導者から指導の手解きを受け、あるいは実習に関わる相談をしていた。場合によっては、信頼できる他の看護師に指導を依頼するなど、<看護スタッフを活用>することで、実習指導者自身が自覚している弱点を克服する努力をしていた。また、教員とも度々話し合いを重ね、<教員と相談する>ことを通して、実習に成果を導き出そうとしていた。実習中の看護師や指導者、教員との良くない人間関係は、看護学生のストレスを強めてしまい、実習が脅威となるネガティブコーピング行動に展開させる。一方、良い人間関係は積極的な問題解決コーピング行動へ導き、学生の喜びや学びへと展開させる⁹⁾。実習指導者は、自身の看護実践力や教育力に過信することなく、有効な学習効果が得られよう働きかけをしていた。

5) 実習効果を上げるスキルを活用する

実習指導のスキルには、フィードバック、相互関係の形成、学習環境の調整の3つの教育的アプローチがある¹⁰⁾。実習指導者は、看護のエキスパートとして、看護学生に臨床の知を示す一方で、実習目標を達成させるように具体的な指導を行っていた。

褥婦に対する指導は、やがて学生自身が体験するであろうことを踏まえた指導を考えさせ、<学んで欲しい方向へ誘導する>や、指導者自身が実践の中で獲得した学びのスキル“こうすれば良い学びになる”といった、<経験知を活用する>ことを大切にしていた。一

方、実習経過の中で振り返ることや気づきを重要視し、学生のレディネスに合わせた指導を行うなど、<指導要項を活用する>スキルも活用していた。

実習半ばで改めて目標を学生と共に<目標達成を目指す>ことを確認し、学生と共にある姿勢を示していた。これは、実習指導者として大切な教育的アプローチである。患者や看護師から学生の<実習の様子を情報収集する>ことは、看護学生の目標までの進捗状況を把握したり、心的コンディションに合わせた個別の丁寧な指導を行うために欠かせないスキルであると考えていた。

6) 学生の能力を可能な限り引き出す

受け持ち患者の看護過程の展開ができないという学生に対しては、すぐに答えを出すのではなく学生自身に考えさせ、気づいてもらえるような指導をしていた。また学生の学びを認め、できたところを褒めるなど、<学生の主体性を引き出す>手法を心得ていた。学生が主体的に看護実践を行うことが、学生のモチベーションを高め、看護を肯定的に評価できると実習指導者は理解している。学生の自己効力感、看護を肯定的にとらえ、やりがいへとつなげる¹¹⁾。学生の実習での成功体験の蓄積は、看護職への動機づけに欠かせないだけでなく、社会性を身につけ人間の成長へも導く¹²⁾。

看護学生は、学生である前に一人の人間として、様々な問題を抱えている場合がある。それぞれの事情や背景、性格を考慮し、<個別指導を心がける>関わりを重視していた。一方的に看護を学んでもらうという姿勢ではなく、看護学生の能力を生かした実習指導を心がけていた。

7) 看護のステキを伝授する

看護学校の卒業式の答辞の中で看護実習が“人生始まって以来の苦難の日々”など、辛い体験として語られることがある。しかし、これは、辛い体験を乗り越え、成長した達成感の表現でもある。

実習指導者は、学生が看護を選んで良かったと思うようなことや、実習が学びになったといったポジティブな気持ちで実習期間を終えることを、実習指導の一つの目標にするなど、<看護のプラスイメージを示す>ような対応をしていた。また、看護独自の視点や看護の楽しさ、やりがいについて語り、<看護のステキを伝える>努力をしていた。

看護の魅力を伝えることは、看護の大変さを乗り越えるための援助になる¹³⁾ことから、学生の成長を促すだけではなく、看護師として就業した後にも、困難に立ち向かう力にもなると考えられる。実習指導者と同じ道を選んだ看護学生に、「実習に来て、(中略)私もこんなにしんどいものとは思わなかったって、学生時代に思っていたんで、何かその芽を学生時代に摘みた

くないなって..。」と語られている内容には、実習指導者が、学生にとって可能な限りポジティブな形で実習を終了させようとする意欲を伺うことができる。

まとめ

看護学生から看護モデルとして支持された実習指導者6名の実習方法について質的分析をし、7カテゴリーを抽出した。実習指導への高いコミットメントをもち、効果的な実習を目指す真摯な指導を行っていた。

おわりに

本研究では、看護学生により看護モデルとして支持される看護学臨床実習指導者の実習指導方法の一端を明らかにすることができた。しかし、6名という限られた人数による調査結果であり、一般化することは困難であると思われる。協力者の数を増やしてデータの蓄積を行うことは課題である。

看護モデルの育成は、看護師確保のみならず看護の質向上のためにも重要である。今後も臨床での効果的な看護教育に取り組んでいきたい。

謝辞

調査に協力していただいた看護師の皆様と質的分析にご助言いただいた太田節子前教授に感謝いたします。

文献

- 1) 清水佐智子：看護学生の就職活動における情報収集と意思決定要因，日本看護学会論文（看護管理），38号，261-263，2008.
- 2) 大井千鶴，船島なおみ，亀岡智美：看護教育学研究18(1)，7-20，2007.
- 3) 豊島三枝子，木村久美子：看護学生に職業的アイデンティティの形成における臨床看護婦の役割，第28回日本看護学会集録（看護管理），240-243，1997.
- 4) 小笠原知枝，吉岡さゆり，山本洋美，秋山智弥，江口瞳，片山はるみ，長谷川智子：看護学生の臨床学実習環境とストレス・コーピングに関する実態調査研究，広島国際大学看護学ジャーナル，7(1)，3-10，2009.
- 5) 伊藤美奈加，大高恵美，牟田能子，三瓶まり，佐々木理恵子：日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査 卒業生の就業・進学状況と卒後の資格取得の実態，日本赤十字秋田短期大学紀要，11号67-75，2007.
- 6) 等々力菜美：臨床実習で学生の学びに影響する看護師の行動，第36回日本看護学会集録（看護教育），275-277，2005.

- 7) 三浦幸枝, 高橋成子, 武田リカ, 角屋久美子: 指導者と学生の人間関係から見た実習環境, 第34回日本看護学会論文集(看護管理), 332-334, 2003.
- 8) 中村文子: 臨床実習指導者の自己理解の必要性について — 自己評価と自尊感情・自己重要との関連, 神奈川県立保険福祉大学実践教育センター 看護教育研究収録, 31, 173-179, 2006.
- 9) 三浦幸枝, 高橋成子, 武田リカ, 角屋久美子: 指導者と学生の人間関係から見た実習環境, 第34回日本看護学会論文集(看護管理), 332-334, 2003.
- 10) 細田泰子, 山口明子: 実習指導者の教育的アプローチの特徴とその関連要因, 日本看護学教育学会誌, 14(2), 1-16, 2004.
- 11) 野崎真奈美: 初めて臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた状況の分析, 第30回日本看護学会収録(看護教育), 44-46, 1999.
- 12) 菊池麻由美, 武田美和: 「看護の魅力」を伝える指導者たち, 看護教員と実習指導者, 2(4), 57-61, 2005.